

(2) 中村中学校

学 校 長 浜口 和彦
校内研究代表者 浦田 国宏

1. 研究主題 「 見方・考え方を働かせて、課題解決できる生徒の育成 」

～個別最適な学びと協働的な学びを通して～

2. 研究主題設定の理由

本年度は、県の指定「通常の学級における合理的配慮実践充実事業」、「不登校支援推進プロジェクト事業の2年目」、「中学校全学年35人学級編成に係る研究指定」の3年目、「授業づくり講座(国語)」及び「『令和の授業を創る』推進プロジェクトにおける授業づくり講座教育DX推進スクール」、「中学校組織力向上のための実践研究事業」の9年目の研究指定を受けて研究を進めた。また、本校では、これまで国や県の研究指定を受け、授業改善に継続的に取り組んできた。

例年実施される全国学力・学習状況調査や高知県学力定着状況調査、標準学力調査を検証軸として位置付け、取組の検証や改善をスパイラルに行ってきた。自校の学力調査結果を各教科で分析した中から、「未知の場面で、これまで身に付けた知識・技能を活用して、自力で課題を解決すること」、「目的に沿って考えを示したり、適切な根拠を示すこと」、「課題解決に向かって見通しを持って自ら探求を進めること」に課題があると分析した。

そこで、主体的・対話的で深い学びを実現し、これらの資質・能力の育成に向けて、問題・めあての設定を工夫し生徒が課題意識を持って学びを進められるような授業づくり、学習課題に向けて、生徒が習得した知識・技能や様々な情報を関連付けながら、個別での学びと協働での学びを自由に行き来しながら学びを進めることができる授業づくりが必要であると考えた。また、その実現に向けて、生徒が端末を効果的に活用し、他者参照・途中参照などを通して学びを深めていけるような授業づくりを目指した。

以上のように、生徒が主体となって、個や協働での学びを往還する授業づくりを推進し、自ら考え、課題解決ができる生徒の育成を目指したいと考え、上記の研究主題を設定した。

3. 研究の進め方と方法

生徒が主役の授業づくりを目指すという共通認識のもと、学力向上部会、なかまづくり部会の2つの研究部会と、各教科会及び教科連携を図る教科主任会で研究を進めてきた。研究主題を達成するために、以下に示すことに取り組み、検証・改善を行ってきた。

(1) 学力調査等の分析を活かす取組

全国学力・学習状況調査等、各調査の自校採点、業者採点の分析と課題の共有、取組の検証等のサイクル化

(2) 授業改善の工夫

①研究主任—教科主任会—各教科会の連携による授業改善

- ・全体で確認した課題などから、授業改善の方向性について研究主任から提案
- ・月2回の教科主任会で共有・協議・実践の交流
- ・教科主任から各教科会への共有、具体的実践についての協議・確認等
- ・教科会でノートや板書、成果物、テストなどから検証及び授業改善

②研究授業の実施(校内3回：数、技、体、美、国、授業づくり講座：理、協働校事業：社、英)

- ・参観の視点がずれないような工夫…教科長による授業前の説明、TSシートの活用、
- ・授業アンケートの実施…課題の焦点化 → 提案

④普段の授業の振り返り

- ・授業セルフチェックアンケートの定期的な実施…授業のスタンダードに対する各教員の取組状況の把握と、取組の焦点化

- ・管理職による授業参観…項目を設定（板書、ノート、問題、めあてなど）して管理職が授業参観、授業者へのフィードバック

（３）小中連携の推進

①中村小中合同校内研修の実施（年３回実施：５月、８月、１月）

- ・研究チーム（国語、数学、社会、英語、理科、体育）をつくり、板書やノート交流、授業での端末活用（教育DX）についての交流、小中連携の成果・課題及び、今後の連携についての協議・成果物（研究の歩み）の確認、来年度以降メンバーが変わっても活用し、小中連携につなげる

③中村中校区合同研修会の実施（８月実施）

- ・中村小、中村南小、東山小、下田小、利岡小、竹島小、大用小、蕨岡小、中村中の教員が集まって、各教科での教育DXの取組、ICT活用事例などを持ち寄り、情報交換を行なった。
- ・共通の学習規律アンケートを作成し、年２回実施。変容を見取り、各校の校内研で説明することで、課題を共有。

４．今年度の成果と課題

成果

- ・全国学力調査の分析の共有を、全教員で行い、本校の生徒の強みと課題について協議する中で、どのような授業を通して、どんな力を育てていく必要があるかという協議を行った。また、協議を通じて確認したことを、各教科会で具体的取組に落とし込み、実践につなげられるようにした。全国学力調査の分析をもとに行った取組の設定をPDCAのPに位置づけ、その後の高知県学力定着状況調査の分析及び共有をCに位置づけて、取組の修正などについて全体で協議を行った。また、その目的に合わせて分析シートも作り変え、何を目的として分析を行うのかを明確にした。
- ・小学校との合同校内研修では、教育DXにおける取組の共有に加え、取り組んだ上での課題や、主体的・対話的で深い学びを実現するための、今後の取組の方向性などについて各教科で共有し、小学校と同じ認識を持って取組を進めていけるようにした。
- ・DXを意識した授業研究会や模擬授業などを多く設定し、生徒が端末を活用しながら学びを進める授業のイメージについて全教員で共有することで、授業の中での生徒の端末使用頻度や、その有用性についての生徒の認識が高まっている。また、その中で表出した課題について共有・協議することで、今後も端末を活用させながら授業をつくっていくことを前提として、どのような点を意識して取り組まなければいけないか、共通認識を持つことができた。
- ・授業研究会の中で、授業中のメモの共有などをして、授業を見る視点を共有した。また、メンター会や教科会などで、授業動画を見ながら、ストップモーションを使い、気になった場面について協議をするなど、若年教員の授業を見る眼を磨くための研修を設定できた。
- ・授業セルフチェックアンケートを定期的実施することで、本校の授業づくりにおける基本的な視点を確認しながら授業づくりに取り組むことができた。また、回答結果を検証することで、本校の授業づくりにおける課題を明確にし、全体で共通認識をすることができた。

課題

- ・各種学力調査の結果において、目標値に達していないものがあつた。特に、知識・技能を問われる問題において課題が見られ、生徒に付けた力が付いているかという見取りが不十分であることが要因として考えられる。
- ・各授業アンケートの中で、生徒が問いや学習課題達成に向けた意欲を持って学習に取り組めるように、課題や問題・めあてを設定することに課題が見られ、取組の徹底ができていない。
- ・学校全体の課題や取組の共有を受け、各教科で具体的取組などについて協議を行っているが、日々の実践につながっているか、その進捗把握が十分にできていない。
- ・授業の中で端末活用や、協働的な学びが先行してしまい、生徒が主体的・対話的で深い学びを通じて資質・能力を身に付けられるような授業づくりが不十分である。